

Title	慶應義塾図書館蔵『はちかつぎ』解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2000
Jtitle	三田國文 No.31 (2000. 3) ,p.38- 54
JaLC DOI	10.14991/002.20000300-0038
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20000300-0038

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾図書館蔵『はちかつぎ』解題・翻刻

石川 透

解題

ここに紹介する慶應義塾図書館蔵『はちかつぎ』は、現在でも昔話として伝えられている『鉢かつぎ』のことである。物語として書き留められたものとしては、本書のような室町末期写本が最も古いようだ。松本隆信氏「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』、一九八二年八月）では、数多い写本・刊本の中で、本書を一番最初に置いている。写本として最も古いし、本文も古態を残しているということなのであろう。ただし、本文的には決して優れているとはいえず、誤写と思われる所がかなりある。『影印室町物語集成』第一輯（一九七〇年一月）に影印されているが、翻刻されずにきた。

本書の書誌は、以下の通り。

所蔵、慶應義塾図書館

番号、一一〇X—三二四—一

形態、袋綴、一冊

時代、「室町末江戸初期」写

寸法、縦二七・八糎、横二〇・〇糎

表紙、栗皮色表紙

外題、表紙左上に「はちかつぎ」と朱書

内題、ナシ

料紙、楮紙

行数、半葉一〇行

字高、約二五・六糎

丁数、墨付、三十七丁

奥書、ナシ

印記、巻首「残花書屋」、巻末「戸川氏蔵書記」の朱印

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点、「」・『』括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。なお、補入の細字は（ ）括弧に入れ、字の欠損している所は□で補った。

はちかつぎ（外題）

（第一丁欠、但し以下三行の文字は残る）

けんかわちのく

ますかすのたからに

けんを心を

なき御こゝろ、ありさま、みすてをかんことのあさましきよ」と、なみたをなかし給ひける。ひめきみも、いとけなき御こゝろに、かなしくおもひ給ふことかきりなし。

はゝうへ、なかるゝなみたをおしとゝめて、そはなるてはこをとりいたし、なかになにをかいられけん、よにをもけなるを、ひめきみの御くしのうへにいたゝかせ、そのうへに、かたのかくるゝほとのはちをうちきせまいらせて、はゝうへ、かくこそよみ給ふ。

さしもくさふかくそたのむくわんせをん

ちかひのまゝにいたかせぬる

かやうにうちなかめ給ひて、つゐにはかなくなり給ふ。

ちゝは、おふきにをとろき給ひて、「いとけなきひめきみをはすてをき、いつちともしらすなり給ふぞ」と、なき給ひければ、かいそなき。

かくて、あるへき事ならねは、なこりはつきせず思とも、むなしきのへにをくりすて、花のすかたをけふりとなし、月のかたちはかせとなりてそちにけり。

かくて、ちゝ御せんは、ひめきみをちかつけたてまつりて、

「みなせことなりたることのふひんきよ」との給ひて、いたゝき給ひたるはちをとらんとし給へとも、すいつきてさらにとられす。ちゝはおうきになけき、「いかゝせん。はゝうへにこそはなれめ、かたはつきぬる事のあさましきよ」とて、なけき給へとかいそなき。

かくて、月日をすきゆけは、あとのきうやうとりをこないて、思ひはひめきみの御まへにそとゝまりける。春はのきはのむめかへの、花はあらしにきそはれて、こすへはまはらのあをはそと、なこりをしく思へ共、又こん春をまちて、さ月の山のはに入めれば、しんやのやみとへたつれと、又のゆふへにいてぬへし。わかれし人のをもかけは、ゆめちにもさたかならず、いつの日のなんときかわかれしを、いかなる人のふみそめて、あふ事なからんと、思ひまわせはをくるまの、やるかたもなきふせいかなと、よそのみるめもあはれなり。

かかりけるほとに、ちゝ御せんの一そく、したしき人よりあひて、「いつまで、をのこのひとりすまいして、さひしきところのそてまくら、なけくといまはかいあらし。いかなる人をもかたらいて、うきにわかれしなこりをも、なくさみ給へ」とすゝめられ、「さきたつ人はとにかくに、のこりうき身とかなしさと、おもひしこともよしなくて」とありければ、「ともかくもはからい」とありければ、一もんの人ゝよろこひて、さるへき人をもとめ、心ゝ、もとのことくにむかへをく。

うつれはかわるよのなかに、人のこゝろの花なれば、秋のもみちはちりすきし、そのをもかけは、ひめきみはかりそなけき給ふ。かのきたのかた、此ひめきみを「かゝるふしきのかたは

物は、よにあるよ」とて、にくみ給ふ事、たとへやるへきかたそなき。

かくて、まゝはゝに、ひめきみ一人いてきたまへは、いよ／＼はちかつきをそ、みし、きかしと、なみのたちいにも、ことのほまて、にくみ給ふ。はちかつきは、あまりにやるかたもなきまゝに、はゝの御はかへ参りつゝ、なく／＼申給ふやう、「さらてたに、うきにかすそふよの中の、わかれをしたふなみたかは、しのみははてすなからへて、あるにかなき我がみそと、思ふにいとゝふしきなる、かたはさへつきぬる事のうらめしさよ。まゝはゝこせんのにくみ給ふことはりなり。したしきはゝうへにすてられまいらせ、のち、わかみなにもなるならは、ちゝ御せん、いかになきあるへきと、思ふはかりをこゝろくるしくおもひしに、いまのはらに、ひめきみのいてきたまへは、ひめきみのちゝは、おほしめしをかん事もなし。まゝはゝのこせん、にくまるゆへに、たのみしちゝもをろかなり。いまはかなきいのち、とくしてむかひとり給へ。をなしはちすのゑんとなし、こゝろやすくあるへし」と、りうていこかれ給へ共、しやうをへたつるかなしさは、「さそ」とこたふる人そなし。

まゝはゝ、此よしきゝ給ひ、「はちかつきの、はゝのはかへ参りて、とのをもわれ／＼をも、おやこをも、のろふ事こそおそろしや」と、まことにひとつもあらはこそ、そらことのみ申つけ、ちゝにたひ／＼いひければ、をとこのこゝろのはかなさは、これをまことゝこゝろへて、はちかつきをよひ出し、「ふたうのこゝろなり。あらぬかたわのつきぬるを、よにいまはしく思ひしに、とかのなきはゝこせん、きやうたいを、のろふ事

こそふしきなれ。にくしんふかきものを、うちにをきてはなにかせん。いつかたへも、をいうしなへ」との給へは、はゝこれをきゝて、そはへかほうちむけて、さもうれしけにわらいけり。いたはしや、はちかつきをひきよせまいらせて、めしたる物をはきとりて、あさましけなるかたひら一つ、きせまいらせて、みちつちにこそすてにけり。

ひめきみは、しらぬのなかにすてられて、「さて、こはいかなるうきよそ」と、やみちにまよふこゝちして、いつくへゆくへきやうもなく、たゝなくよりほかのことそなき。やゝはるかにあつて、かくこそあしはしける。

のゝすゑのみちふみわけていつくとも

さして行へき身とはをもわす

かやうにうちなかめて、あしにまかせてまよいありき給へは、おうきなるかわのはたへそつき給ふ。

こゝにたちとゝまりて、いつちをさしてまよひありかんよりも、このかわのみくすとなりて、はゝうへのましますところゑ参りなんとおほしめし、かわのはたへ、のそき給へは、さすか、おさなき心のはかなさは、きしうつなみもおそろしく、せゝのしらなみはやくして、そこはかとなきみつのをと、すさまじくおもへとも、うきを心のたねとして、御みをなけんとおほしめし、かくこそあそはしける。

かわきしのやなきのいとひとすしに

おもひきるみをかみものれよ

うちなかめ、つゐに御身をなけさせ給ひける。

御身はしつみけれとも、はちにひかれて、御かほはかりさし

いて、なけれけるほとに、おりふし、りうするふねのとをりけるか、「こゝに、はちのなかるゝは、なにそ」とて、ひきあけてみれば、これははちに、したは人なりけり。ふな人、これをみて、「いかなる物やらんと、をそろしや」とて、きしゑなけあくる。

しはらくありて、をきなをり、つくくくとあんしくらし給ひ、しなんとするもかいそなくて、なにとなりゆく身そとおもひつゝけて、かく計、

かはなみのそこにこのみのとまれかし

なとふたゝひはうきあかりけん

うちなかめ、あらぬふせいして、たとりかねてそたち給ふ。

さて、あるへきにあらされは、あしにまかせてゆくほとに、ある人のさとへいて給ふ。人くこれをみたまいて、「これはいかなる物やらん。かしらをみればはちに、こしよりしもは人かとよ。いかなるやまのをくよりも、ひさしきはちかへんけして、あしてかつゐてはけるそ。いかさま、人けんにてはなし」とて、ゆひをさし、をそろしかりてそわらいける。又、ある人申やう、「たとへ、はけ物にてもあれ、てあしのはつれのうつくしさよ」と、とりくこそのしりける。

さるほとに、(御なをは、やまかけの)「そのち、ところのこくし」ましくける。御なをは、やまかけの三みのちうしやうとそ申ける。をりふし、ゑんきやうにして、よものこすへをなかめ給ふに、うすかすみ、たかとふまとのしつかかやりひ、たくもくさ、そこひにもゆるうすけふり、うはのそらにそたなひける、をもしろかりけるゆふくれを、こひする人にみせはや

と、ゑいし出し給ふところへ、かのはちかつき、あよみよりける。

ちうしやう、これを御らんして、「あれ、よひよせよ」との給へは、さふらいたち、二三人はしりいて、はちかつきをくしてそ参りける。「いつくのうらに、いかなる物そ」ととひ給へは、はちかつき申やう、「われは、かたのへんの物にて候。はにをくれ、そのをもひのあまりのや、あらぬかたわのつきければ、あはれむ物のなきまゝに、なにわのうらによしなしと、あしにまかせてありき」と申ければ、「さてはふひんなり。いたきたるはちを、とりてとらせよ」とて、みなくよりて、とりけれと、しかとすいつきて、なかくとるへきやうこそなかりけり。

これを、人く御らんして、「いかなるくせ物そや」とて、てをたゝきわらいける。ちうしやうとのは、御らんして、「いつくへゆくそ」の給へは、「いつく共、さしてゆくへきかたもなし。はににはなれて、あらぬかたわのつき候へは、みる人ことにをちおそれ、にくかる人は候へとも、あはれむ人はなし」と申ければ、ちうしやうとのはきこしめして、「人のもとにふしきなる物のあるも、よき事の候」との給ひ、おほせにしたかいをかけれる。

「さて、みのふはなにかある」との給へは、「なにと申候へきやうもなし。ちゝはにかしつかれてありしときは、こと、ひわ、わこん、しやう、ひちりき、こきん、まんよう、いせ物かたり、ほけきやう、はちちくのめうもん、かすのきやうをよみしほかの事はなし」と、なかく物はたまはす。

中將は、きこしめし、「なにののふもなくは、ゆとのにおけ」

とありければ、いたはしや、「いまならわぬ事なれと、よにしたかふならい」とて、ゆとのゝひをそたき給ふ。

あけくれぬとすきゆけは、みる人、きく人、わらいなふり、にくかる物はおほけれど、なさけかくる人そなき。あけくれぬと、「きやうすいとれや、はちかつき」とて、三かう四かうもすきさるに、五かうのてんにもならさるに、せめをこされて、いたわしや。又ふしなれぬふよたけの、をのれとゆきにうつもれて、ふしたほれたるふせいして、物はかなけにおきなをり、思ひにしかのゆふけふり、たつなもくるしとうちなかめ、「御きやうすいはいてき候や。はやとり給へ」とさいそくする。「あしのゆわかせや、はちかつき」と、けちする物にせめられ、みたれししはをひきよせて、かくこそつゝけ給ひけれ。

くるしきはおりたくしはのゆふけふり

うき身もともにたちやきへまし

とゑいし、「ゐんくわのむくいにて、かゝるうきよにむまれきて、かやうに物を思ふらん」と、むかしを思ひいてのさと、むねはするかのふしなれや、ほとはきみかしきかとよ、いつまていのちなからへて、うきにたへせぬなみたかは、なからへてすゑもたのまれます、きゝのこすへのはなちりて、なにとなりゆくこのみそと、ひとりくときてかく計、

まつかせのくもふきはらふよにいてゝ

さやけき月をいつかなかめん

とゑいし、ゆをこそわかしけれ。

さるほとに、此三みのちうしやうとのほ、御こ四人もち給ふ。三人はありつきぬ。四人めの御こに、さいしやうきみと申は、

みめかたちゆうにして、むかしを申せは、ひかるけんしの大しやう、ありはらのなりひらかと申けり。春は、花のしたにて日をくらし、ちりなんまてをそ思給ふ。秋は、こうようらくようのにわをなかめ、月のまゑにて夜をあかし、冬は、あしまのうすこほり、いけのつらゝにはをやすめ、をしのうきねも物さひしく、かさなるつまのなきまゝに、ひとりすこしてたち給ふ。

御あにたちも、とうへも、御ゆとのゑいらせ給へは、此さいしやうとのゝ御さうしは、のこらせ給ひけるか、かのはちかつきの「御ゆうつしさふらう」と申こへ、ゆふにやさしくおほしめしける。「御きやうすい」とて、さいいたすてあしのはつれ、うつしく、ちんしやうなりければ、よにふしきにおほしめし、「やゝ、はちかつき、人もなきに、なにかはくるしかるへき。ゆとのしてまいらせよ」との給へは、いまさらむかしを思いたし、人にこそゆとのさせつれとも、人にはゆとのをするやらんとおもへ共、しうめいなれはちからなし。御ゆとのへそ参りけり。

御さうしは、御らんして、「かわちひろしと申せ共、かゝる人もありけるよ。一とせ、花のみやこへのほりしとき、をむろのゐんの花見の御かうのありつるに、きせん上下くんしゆして、もんせんいちをなしつれとも、そのなかに、此はちかつきほとの人なかりつる。いかて、おもふところの人を、みすてたくやおもわれん。いかに、はちかつき、をもひそめにしくれないの、いろはうつろふ事なりと、きみとわかなかかはらし」と、せんしうのまつに、ちきりをはるかにかけ、まんかうのかめにひさしくむすはれる。「これよりのちは、へたつことはあ

るましる、いかにく」との給へは、はちかつき、のきはのまつにうくあすの、又はなならぬふせいして、御返事をものたまわす。

かさねて、御さうし、「これやこの、こわた山にあらねとも、くちなしいろにそめなし、物をいわねのまつやらん、ひきすてられしことのねの、よそにひきてのあるやらん。もし又かさねのつまのあるならば、あわてむなしくきゆるとも、きみゆへならはなかくに、うらみとさらにをもふまし。いかにく」との給へは、そのとき、はちかつき、「のかいのこまの人なれて、心はたけく思へとも、なにと申さん事もなし。よそにひきてのあるやらんと、の給ふことのはつかしさに、みなきれて、よそにひきてもさふらはす。なみのたちゐもかなしきは、むなしきは、の御ことを、わすれもやらぬはちなり。さてはわかみもきへやられて、いつまていのちなからへて、あらぬうきよにすみそめの、いろにもあわぬうらめしさを、なけきはんへる」と申ければ、さいしやうとのきみは、けに、ことはりとおほしめし、かさねておほせのあるやうは、「されはとよ、ういてんへんのよの中に、むまれあいぬるわりなさに、うきむくいそとしらすして、かみやほとけをうらみつゝ、あかしくらしてすこすなり。御身も、さきのよに、のへのくさ木のゑたをおり、思ひしなかをおしへたて、人になけきをせさせつゝ、むくいほとのめくりきて、おやにもはやくをくれつゝ、いまたふたはのいとけなき、こゝろに物を思ひねの、なみたとこせくふせいなり。みつから、はたち、けふまでも、さたむるつまもなし。ひとりかたしくうたゝねの、ゆめさひしくもあけ暮を、すこしてすむもさ

きのよの、御身とちきりふかきゆへ、そのこういんのつきすして、又こゝにめくりきて、よにうつくしき人なれば、ゑんなきかたへはめもゆかす、御身はゑんもあればこそ、かくまでふかく思ひ入。をもひそめにしむかしより、いまあらましのことはこそ、たのもしうこそをもわるゝ。とらふすのへそかちしまや、ちいろのそこ、五たうりんゑのあみたなる、六たうししやうのこなたなる、いもせのかはのみなかみの、ねはんのきしはかわるとも、きみとわか中かはらし」と、ふかくちきりをかけ給ふ。

さて、はちかつきは、きみのおほせのつよきまゝ、をもはぬなからなひきそめ、こよひはこゝにふしたけの、よゝのちきりをかさねのすへ、いかならん我かおもひ、しらすしらぬそのさきに、またいつかたへも、あしにまかせてゆかはやと、思ひくらしけるこそあはれなれ。

さいしやうきみは、「いかに、はちかつき、さほとになにをなかせ給ふ。みそめみへそめたてまつりしより、つゆもをろかに思ふまし。くれなはやかてまいりなん」。つけのまくらに、やうしやうをそへてそおかれける。

はちかつき、いととはつかしきはかきりなし。「わか身人のやうにもあらはこそ、人の心はあすかは、かわるならいのあるまでも、たのもしきとも思ひなん。あるにかいなきありさまは、みゝへぬることのはつかしきよ」と、明し暮らし給ふ也。

御さうし、御らんして、かのはちかつきのふせい、よくくたとふれば、やうはいたうりの花のかに、くもまの月のさしそへて、きさらきなかはのいとやなき、かせにみたるゝよそをい、

まかきのうちのなてしこの、露をもけにてはつかしき、うちそはみたるかほ、あいきやうのうつくしきは、やうきひ、りふしんも、いかてこれにはまさるへきと、ふしきにおほしめしめけるか、をなしくは、かのはちをとりて、十五夜の月のことに、みるよしもかなとおもひける。

さて、わかきみは、ゆとのゝとをたちいて、我か御かたへかゑり給ふ。のきはのむめを御らんして、いつしか、はちかつき、いかにひさしく思らん、けふの日の、くるゝをまつはすみよしの、ねさしそめたるひめこまつ、ちよをまつより久しくて、さて、はちかつきは、つけのまくらとふへ、をくへきところかなければ、もちわつらいてそいたりける。

かくて、やう／＼しのゝめの、あくるとつくるせきちとり、又よこくもゝひかざるに、「御きやうすいよ、はちかつき」「ふせりたるか、をきあかれ、はちかつきめよ」とせめられて、「御ゆはいてきさふらうそ、とらせ給へ」とこたへつゝ、いふせきしはをりたきて、かくこそつらね給ひける。

くるしきはをりたくしはの夕けふり

こひしきかたへなにとなひかん

とうちなかめければ、ゆとのゝふきやう、きゝつけて、「かのほかつきは、はつれうつくしきは、さはかり、われとくすませ給ひたる御ねうはうしゆも、きわめてこれにはをとり給ふなり。ちかつきよりて、かの人にちきらはやとをもへとも、あたまをみればまふ／＼し。くちよりしもはみゆれとも、はなよりうへはみへもせず。ともうはいにわられて、なか／＼思ふもはつかしや」と、思ひもよらぬそこはりなり。

さるほとに、春の日をもそくれないのたそかれときや、ゆふかほの人の心ははなそかし。かのさいしやうの、いつよりも、けにはなやかにしやうそきて、ゆとのゝかたはらの、しはのふしとにたゝすみ、さうなくうちゑもいらすして、ひまをみてこそたゝれる。

はちかつきは、しらすして、くれはとちきりしかねことも、はやよいのまもうちすきて、人をとかむる里のいぬ、こゑすむほとにもなりぬれば、かたみのまくら、ふへたけ、とりそろへもち給ひて、かくはかり、

きみこんとつけのまくらやふへたけの

なとふしにくききりなるらん

とうちなかめければ、御さうし、きこしめして、

いくよりもふしそひてみんふへたけの

ちきりはたへ／＼つけのまくらに

と、かやうにあそはして、てんにはひよくのとり、ちにすまはれんりのゑたとなりなんと、ちきり給ふほとに、つゝむとすれとくれなひの、もれてやよそにしられけん、「さいしやうのきみこそ、はちかつきかもとへかよわせ給ふ、あさましきよ」と、上下なんによは、さたふの物なれば、「ふしきの物そとおほしめし、たちより給ふとも、あのありさまにて、わかきみにちかつきまいらせてと、おもふはちかつきか、こゝろのうちのふとくしんさよ」と、にくまぬ物そなかりける。

あるとき、よそよりきやくしんきたり、よふけていらせたまわぬほとに、やう／＼ひまあきて、あけかたに、さいしやうとの、しのひやかたにらせ給ひければ、はちかつき、をほつかな

くて、かく計、

人まつとうわのそののみなかむれば

つゆけきそてに月そやとれる

とゑいしければ、いよくやさしくおほしめし、ちきりはふかくなりけり。

むかしかいまにいたるまで、わか身にかはらぬことのはまで、よにもつきせぬならいて、とりくくちくちくに、「さいしやうとは、よに人もなきやうに、かゝるまさなき御ふるまい、かつうはをかしき御こゝろかな」と、わらいけるほどに、なにとなく、ちゝうへはゝうへのみゝに入にける。

ちゝはゝ、おほせには、「さいしやう、わかこなれとも、みめかたち、こゝろはへ、けいのふ、なさけはあらしと、ふひんにをふなれば、よのきんたちもそねましさに、ひか事をや人の申らん」。しらぬていにて、めのとにみせさせ給ふ。「まことにて候」と申。

ちゝはゝ、あまりのことなれば、しはしはものをものたまはず。やゝありて、「いかに、めのと、きゝ給へ。なにをよきやうに、さいしやうのきみをいさめて、はちかつきにちかつかぬやうにはからい給へ。さなくは、はちかつきをうしないたまへ。それもかなわぬ事ならば、さいしやうもろともに、いかならんちしまのはてまでも、をいうしなふへし」とそいかられける。

めのと、うけたまはり、「人のおや、こをおもふやみにまよい、みめわろく、すかたありさま、こゝろはへ、をろかにをやはおもわぬに、いわんや、月にねたまれ、花にそねまれ給ふほと、うつくしききんたちを、又をとらぬほとのみたいをも、

をきまいらせて、はなやかに、人々にもかしつかれたまわんこそ、みまいらせたくおほすらん。御ことはりとは思へとも、いもせの中はさもあらず。くもいの月と申せとも、ふしやうをよけす、かけおさす。いやしきしつのをなれとも、をよはぬくもいにまよふもあり。されは、むかし、とはのいんにめしつかはれしともからは、くもいの月をほのかにみて、こゝろのやみにたとりかね、かくてはてなんみのうきを、ふてにまかせてかわせし、なさけにもれぬならいて、あふせはあさききりのすへ、あわぬむかしそののわるゝ、たかいの心はせんかたなし。されとも、うきよは、こゝろにかなわぬことなれば、つゐにしゆきやうのみとなりて、ふつたうとなり給ふ。なかくろ、みかとは、いやしきけちよに心をかけ、ためしすくなきはたけの、よになかれん御なを、かなしみ給ひ、つゐにくらいをすへり、御身とならせたまへとも、なをも人めはしのたのもり、したはのつゆときへ給ふ。これもなさけのゆへとかや。かのはちかつき、いやしき物なれと、むかしのちきりつきねはこそ、かゝる事もはんへるれ。されとも、ゆくすへ久しきわかきみを、たちまちをいうしない申さん事、おほせられけるいまわしきよと、思ひはんへるなり。又、とかもなきはちかつきを、うしなわんもつみふかし。つほめる花と申せとも、つゆふくまねはひらかななり。けせんのおうなと申とも、をとこひらけはひらくなり。はちかつきかとかは、ゆめく候はす。わかきみは、かうくの一の人なり。ちゝこはゝうへきこしめして、もつてのほかのけきりん申さは、さためてすてさせ給ひなん」と、申すてゝそたちにける。いまにはしめぬ、れんせいか、こゝろのうちそやさ

しけれ。

かくて、めのとは、わかきみの御まへに参りければ、きみは御らんして、「いかに、めつらしや」、よろこひ給ひて、なにとなき御物かたり申て、「きこしめせ。まことしからす候へとも、わかきみは、はちかつきかもとへ、かよはせ給ふよし、はうへ、きこしめして、『さることはあるましく候へとも、ころしらねはふかくなり。まことにであるならば、ちの御みゝにいらぬまに、はちかつきをうしなわん』と、おほせにて候」と申ければ、わかきみ、きこしめし、「おもひまふけたるおほせかな。一しゆのかけにやとり、一かのなかれをくむ事も、たしやうのゑんときく物を。むかしもさる事あればこそ、しうのかんたうをかふりて、たちまちむけんにつる事も、あるなれは、をやのふしんをかふりて、うらみのあるへきそ。そのうへ、御みゝにたち、たゝいまくひをめさるゝとも、はちかつきゆへならば、露ともうらみをもふまし。かの人をすてん事、思ひもよらぬおほせかな。此事もちい申しぬとて、はちかつきもろともに、いつかたへもいたされ、いかなるのゝすへ、山のをく、いわ木のかけにすむとても、思ふ人にそふならば、ゆめ／＼かなしがるまし」とて、たけのゝこしよをたち出て、あさましき、しはつむとほそに入給ふ。

ひころは人めをしのひつゝ、よなく／＼かよひ給ひしか、めのとの参て申せしのち、ひめもそにうちそいて、わたらせ給ひしほとに、あにたち、とうさもかなふまし、さかつきもさけ給ふ。これを何ともをもわすして、人をもはゝからす、あさ夕をくらせ給ひける。

はうへ、きこしめし、「さもあれ、はちかつきは、いかにま、へんけの物かはけて、わかきみをうしなわんとするやらん。いかゝせん、れんせい」とそおほせける。

めのと、申されけるは、「わかきみは、さならぬ事をさへ、いろふかく、物はちさせ給ひて、おほろけの事までも、つゝませ給ふ。『此事を、いさゝかも、はつかしけにもわたらせたまわす候』と申たりければ、いかなるてんまきちんも、をもてをむくへきやうもなし。『此うへは、なためかしまいらせて、御らんし候へかし』と、『あに御身たちをはしめとして、さしきをも、御さかつきさゑまいらせ給ひ候はて、上下の人々は、わらいくさに申もかたはらいたく候』と申ければ、『さらは、よめあわせをめされ候はんよし、ひろふくち／＼に申ければ、さりととも、御はつかしくおほしめして、すてさせ給ふへき』と申ければ、けにもとおほしめし、ころは、やよひなかはのことなれば、のきはの梅はちりすきて、こすへにほひやのこすらん、とをやまさとのをそさくら、にわのあほやきいとみたれ、春かせのみや候はん、おもしろかりけるおりからに、かのはちかつきをわらはんとて、一しほさしきをけつこうして、よものにはのをもしろさは、ひからは春のけしきに、梅とさくらとあらそひて、つはきあほやきいろ／＼に、花をみすてゝかへりけり。なこりをしくや思らん。みなみをみればまつとふし、をのかさかりをいろむらさき、みつのそこさへにほふらん。こすへにせみのこゑたえず、花たちはなはさかりにて、たかそてにほふうつりかの、まかきのころもなつかしや。にしのにわゝ秋のいろ、みねのらくやうかせふけは、ふもとのもみちゑたうすく、しく

れいろをそめかねて、あらしこらしみにしみて、こゑくむしもよわりゆく。きたをはるかになかわれば、ふゆのけしきに物さひて、たけのうす雪しろたへの、いけのつららにみつとりの、うはけのしもやはらふらん、とを山さとのうすけふり、うはのそらにやたちぬらん。「あれを見るをもしろや、いつれをみるもなか／＼に、たとゑんかたなき人なりとも、さうなくいかてまいるへき。まして申さん、はちかつき、はつかしきに、いつかたへもうせぬへし」と申ければ、又、ある人申けるは、「つれなくて参りなん事もありません」と、とり／＼に申ける。

此よし、さいしやうとの、きこしめし、「いかに、はちかつき、きゝ給へ。御身にちかつきたるよし、人／＼きゝ、きうくんせられけれども、みつからもちいぬにくさげに、『よめあわせさせ、はちをかゝせん』とはからい給ふなり。いかゝせん。はしめて物を思らん」と、うちかたらいてなげき給ふ。

そのとき、はちかつき、申やう、「われゆへ、御みに、はちをあたへ申さん事もうらめしや。かくてありてもよしなし。いつかたへも、あしにまかせて出なん」となげき申ければ、わかきみ、きこしめし、「御みにはなれたてまつり、一日へんしもなからふへし共おほふす。いつかたへも、をなしみちに、をはしまさんかたへゆきなん」と、いとゝふかくそちきりたまふ、たかひのこゝろせんかたなし。

かくて、いかゝあるへきとすきゆくほとに、よめあわせの日も、やう／＼になりければ、二人うちつれて、いつかたへも、いてへきことを給ひける。

さすかに、ちゝはゝすみなれし、花のこきやうをたちいてゝ、

ゆくゑもしらすなりなんこと、かなしき(事)かきり、いつれわかれのみち、しやうをへたつるみちもあり、とはいへとも、いのちたになからへは、ついにめぐりあいなんと、おもひさためていらせ給へは、はちかつきは、みまいらせ、「いかに、わかきみ、御とゝまり給へ。われこそ、いてまいらせ候はん。まことにちきりくちせすして、つゆのいのちなからゑは、一とはめぐりあふへき事もあらん。もとのしづくのならいにて、もしもはかなくならは、くさはのこけのしたまでも、こゝろさしをはわすれまし。われゆへきみの御身を、いたつらにならせたまわん事のみ。いとま申て、わかきみ、

おもふとて物をいわねのまつならは

たにへたつともをもひをこせよ」

とゑいし給へは、さいしやうとの、いとゝかなしく思、かく計、

いとゝしくくるしき物をきみにしも

ゆわねのまつのよそになれとや

御返事ありて、なか／＼なと思ふとも、かはねはこけのしたまでも、をなしみちにとかたらいて、たちいてゝ、てをくんで、しはのとほそをたちいてんとし給へは、ひめきみ、いたゝき給ふはちは、まへにそをちにけり。

わかきみは、これをとつて、「これはいかに」とて、はちかつきをみあげ給へは、これやこの、すみよしのまつのみとりのこのまより、もりくる月にことならず。ひすいのかんさしは、せいたいとか、たてにみすをなかくすことならず。ふようのまなしりあさやかに、はちすをふくめるくちひる、けんろの音のかひたまにて、らんしやのにほひなつかしく、すかたみればあき

の月、かたちを物にたとふれば、のへになまめくをみなへし、露をもけなるふせいして、わかきみ、あまりのうれしさに、なみたもよをすはかりなり。

すかたかたちのうつくしき、人にはますとをとるまし。きせまいらせん御いしやうそく、いかゝ、たゝいまのことなれば、かるともよもかさし、めのとをよひてたのまんと、思わせたまゑとも、つかいにつかにやるへき物もなし。ちゝにあんしわつらいてそいたりけり。

はちをとりあけて、したなる物をみたまゑは、心もことはもをよはれず、てはこあり。ふたをひらいてみ給へは、ふたやかけこのそのしたに、しやきん、こかねのまるかし、しろかねこかねのてふし、ひさけ、さかつき、おしきにいたるまで、いづれもしやきんをのへてあり。こかねにてつくりたる、みつなり

のたち花、ゑたおりあり。そのしたをみ給へは、からあや、からおり物、十二のひとへのきぬ、ちしほのはかま、かけをひみて、こゝろをつくして入てあり。

ひめきみ、これを御らんして、「わかうへの、『あさ夕に、はせのくわんおんに参り給ひたるひめなれば、すへのよまでもまほり給へ』とて、はちをいたたかせ給ひしか、きみにちきりふかうして、いま又こゝにをつるなり。おもへは、はゝの心さし、うみよりふかき御おんなり。又、くわんおんの御りしやうほと、ありかたき事はなし」とて、うれしきにも、つらきにも、うちかたらはせ給ひてそありける。

これをは人のしらすして、「われまいらん」、「人まいらん」、「みてきてかたれかし」、「つれなくそのまゝいたやらん」、「い

つかたへもゆきぬるか」、「さしきをそしと申へし」とて、たてかへくひまもなく、しはのとほそへつかいをたてられる。ひめきみは、みたれしはのかけにをき、われははしにいさせ給ひて、「たゝいま、やかてまいらせん」と、なんとも御返事を申されけり。

大よめこせんは、御とし二十一、からあやはきかさね、にほひのはかまふみくゝみ、御くしははかまとあらそい、物くしけなるふせいして、せうとこの御ひきて物には、きぬ五、そめ物十二。

二郎よめ、十九なり。さしてとりて、うつくしくはなれとも、ほそくとして、ちんしやうにゆゝしけにみへさせ給ふ。御しやうそくには、ふちかさね、こてうのきぬすりのはかまとふみくゝみをなし、とほそにみへ給ふ。御ひきて物には、御こそて五かさね。

三なんのよめこは、御とし十七にて、あいくゝとほけやかに、たけにすこしたらぬほとなり。御しやうそくには、からきぬのこうはい、花かさね、こけをり物のはかま、ふみくゝみ、さも花やかなるふせいして、御ひきて物には、そめ三たん、あや十たん。いづれも、みめかたち、御ひきて物にいたるまで、われをとらしときゝめける。

さいしやうのきみは、いらせ給ひて、御さしきのやうを御らんしければ、「われもくゝとしやうそくき、人をわらはん心にて、ねらいゐさせ給へとも、此はちかつきにくらふれば、ほさつのまへにけたうめか、いましめられたるにことならず。みめかたちはしめとして、ひきて物にいたるまで、まさしく、をと

る事あらし」とおほしめし、心のうちのうれしさは、ほとけのよに、みのりをきくにことならず。

さて、はちかつき、をくへきさしきとおほしくて、一たんさかりて、すへに、やふれたるたゞみをしかれたり。わかきみ、これを御らんして、「いかにいやしきみなりとも、あまりになさけなき事なり」と、おほしめし候へとも、「よし／＼、さしきによるへきか」とおほしめし、又、はちかつきのもとへをはしまして、御さしきのやうを、ねん比にかたり、をしゑ給ひける。

人々、申あいけるは、「こせんたち、いつれも／＼をとりました。はちかつきに、いつかたへもゆかぬことのにくさよ。

こなたへかれかいてたらんをみては、なか／＼御さしきにはあられまし。あなふしきや。いてへきと思やらん」と申せは、よめ御せんたちは、しゝめき給へは、しうとこせんは、「たゞいま、かれかいてたらは、たちまちはちをかゝせん事のわひしさよ」と、「なにしによめあわせといゝつらん。よくもあしくもしらぬていにてをくへき物を」と、くやしくそをもわれける。

さるほとに、「さしきをそし」とせめければ、ちからなく、いて給ふ。人／＼は、こゝろをすまし、めをひき、ゆひをさしてわらはんとて、のきはのはねつくろいして、なみいたりけるところに、さをいして、としのほと、十五六はかりにて、かみのかゝり、せいのもと、かほのあいきやうにほやかに、かたちを物にたとふれば、くもいのさくら、あけほのに、かすみのまよりさきいてゝ、にほいのもるゝふせいして、かいしやくとてもあらはこそ、てつからつまのきぬをとり、ひきなをし、あゆみいてさせたまふ。

わかきみ、御らんして、「かすをしらすなみいたる御さしきへ、なかへたゝひとりいてぬること、さこそはつかしくおもひ給ふらん、こゝろのうちのいたわしさよ」。おもひかねたる御けしきを、はゝ、御らんして、ことはりとおほしめし、「ゆふにやさしきはちかつきかな」と、「てんにんのやうかうか、いかて、はつさしきをくへき」と、はゝうへのをはします、ひたりさになをし給ふ。人ひと、めをすまし、われも／＼とまほりけり。

ひめきみは、いとはつかしけなるふせいして、うちそはみたるそのけしき、たうのけんそうくわうていの、てふあいせられしやうきひの、なんせんのゆかのうへにそ、かたむく月の、山のはに入なんことをかなしみ、そなたのかたをなかつゝ、うちそはみたるそのすかたも、いかてかこれにまさるへき。御しやうそくには、さくら、やまふき、こきつゝし、十二ひとへをひきかさねて、くれないのちしほのはかまふみくゝみ、ひすいのかんさしゆりかけ（たる）、そのふせいを、とのうへ、御らんして、「さもあれ、ふしきのはちかつきかな。むかしきこへしやうきひ、りふちん、そとをりひめ、をのゝこまちかわかさかり、こうきてんのほそとのゝたちすかた、をとにきけ共めにはみす、これにはいかてまさるへき」とおほしめし、御めをあらにまほらせ給ふ。

人／＼は、わらはん事はさもあらず、「さもあれ、かほとのはちかつきにてはなき物を、はちのなかよりむかいけるか。うつくしくなるならば、わらはも、はちかないたゝきて、しはつむななにもこもりいて、ゆとのゝゆをもわかしなん」と、かう

みやうかほにそねみけり。

かくて、ひきて物をいたされける。しろかねのさかつきに、こかねのさかつき、しやきん百りやうつませ、みつなりのたち花とそへ、とうのうへの御まへにをく。はうへの御ひきて物には、こきをり物、からをり、からにしき、けんほのなしのゑたをり、しろかねこかねにてつくらせて、これをそへてそいたされたる。

あにみたちのこせんたち、すいふんかれをみをして、わらはんとこそたくまれしに、「すかた、すかたかたちしやく、ひきて物にいたるまで、をとりけるこそむねんなれ。さりながら、くわんけんのみちはよもしらし。」「みめはけらうなり共、くわんけんのみちをころへたり。」「ては何ほとのかくそ。」「うたの心はよもしらし。」「さいしやうのきみは、くわんけんもしやうすなり、かたうのかたもあきらめ給へは、のちには、おしへ給ふへし。こよひのうちに、くわんけんをはしめ、うたをよませ、物かゝせ、みてわらわん」と、こせんたちのたんかうなり。そのうち、御さかつきもいてければ、こなたかなたへさしめくり、ひめきみにさし給ふ。とうのうへ、おほせあるやうは、

「このところは、二せん三百ちやうのところなり。一千ちやうのところをは、たゝいま、ひめきみ（のひき）て物にたてまつる。せんちやうのところをは、さいしやうにとらす。三百ちやうのところをは、あにたちにとらす。けふより、わかよをは、さいしやうのみたちにたてまつる。これをいやとをもはんには、をや共こともおもふまし」との給へは、三人のみたちは、心へかたくは思へとも、「きめいそむきてなにかせん。ゑほう

くわほうはむまれつき、たにんにてもあらはこそ、ゆみやのきす共思ふへけれ。いまよりのちは、さいしやうを、そうりやうとあをかん」とて、三人、とうしんにりやうちやうする。ちゝは、これをきゝ給ひて、ゑみをふくみてよろこひ給ひける。

そのうち、さけもなかなになりければ、くわんけんをそはしめらる。ひき物ふき物とり出し、はれもくゝとみへければ、ことはははうへひき給ふ。太郎よめこはひわのやく、二はんのよめはほうきやう、三郎よめはしやうかにて、つゝみはとうへうち給ふ。太郎の御ことはしやうのふへ、二郎のみたちはひちりき、三郎のみたちは、「わこんはひく人なし」と、おほせらるゝ。

そのとき、御せんたち、「されはこそ、みめこそ人にまさるとも、かかるあそひのやうたいは、ゆめにもいかゝきくへきなり。ことさらわこんは、そのみなかみをしらすして、さうなくひく人あるましや。われらも大かた、ことをはならへとも、わこんのしらへ、たいしなり。これをひかせてはらわん」との給ひて、御きやくちんまでわたらせ給ふ。

そのうへ、「わこんはきみへ」との給へは、はちかつき、御せんたちのころのうち、大かたすいりやうし給ひて、「いかさま、みつからか、いやしき物にて、くわんけんといふ事しらし、いかやうにもわらはんための心なり」と、「われもよにありしときは、ちゝはゝにかしつかれ、ならいしかくのみちなれは、一へん二へんはしんしやくして」と、おほしめし、「かやうの事は、をとにはきゝ候へとも、こよひはしめてちやうもん申候へ。てにふれ候はん事、なかゝかない申し」との給へ

は、わかきみは、御らんして、「いかならは、人のめにわか身かはちかつきとみへよかし。ゆきてひかん」と、かすくあんして、いたまへり。

御せんたちは、いよく、「ひめきみ、それく」とすゝめ給へは、そのうち、はちかつき、もとより心へたるみちなれば、なにかはひきもそんすへき。そうすいのみひち、わこんのしらへの大事なるを、こよひをけうにもよをして、二三へんひかける。

さいしやうの御たちは、ふへをふき給ふか、このうちのうれしさは、一しほおもしろくおほしめし、てんにんもやうかう、ちしんもうこくはかりなり。

御せんたちはしめて、上下の人々、みゝをそはたて、めもみあわせて、「いかなる人にてあるやらん。いかさま、むかしつたへきく、たま物まいか、をそろしや」と、とりくにこそ申ける。

やうくくわんけんはすきければ、御さかつきそ参りける。わかきねうはうしゆよりも、(とのへ)さくらかゑたにふちの花、きくゆきをもたせつゝ、「御さかなに」とてまいらする。

御せんたちは、「とりあけて御らんせよ、ひめきみ。春となつとは、もとよりも行かう物とはしりたれと、さくらかゑたにふちの花、このありてやさきつらん。あきとふゆとをとなりにて、こからしふきてをとろかす、秋のもみちのいろをます。されとも、きくゆきをもつ事は、なかにまざるをもしろさよ。ひめきみ、一しゆあそはし候へ」とて、すゝりとりよせ、すみすり、ふてにそめ、「それく」とせめ給ふ。

はちかつきは、きゝ給ひて、「あら、むつかしのおほせやな。わらわも、此とし月、ゆとのゝかたはらに、おもひをしはのゑたおり、あき□□なれしみつくるま、むすひあけたりはかりにて、うたと申事はゆめにもしらす。御せんたち、あそはし候へ。うけ給りて、そのうちはともかくも」との給へは、「もとよりうたはよみへはこそ、ことはのなまかけもなく、たゝよみたまへ」とせめられて、「あらむつかしや」、なとてかくなん、

はるははななつはふちなみあきはきく

ふゆのゝしもにをくものそうきあそはしたるふてのほと、もしのならひ、をのゝたふふうかふるいふても、かくやとめをそをとろかす。

御さかもりもすきければ、をのくくかゑらせ給ひける。「はちかつきありさま、みめかたち、このろはへ、のう、さいかくのめてたさよ。さいしやうのおもひつくこそことはりなれ。をなしおんなにちきりをこめは、かやうの人に、一夜なりともすこさはや」と申あへりけり。

かくて、ひめきみは、れんせいをはしめとして、かいしやくのねうはうたち、二十四人あいそゑて、さいしやうのすませ給ふ、たけの御しよへそをくられける。わかきみのこのろのうち、うれしさはなにゝたとゑんかたそなき。

かくて、なに事もこのまゝの事なれば、かみをうやまい、ほとけをねんし、かうくのみちをほんとして、ほかにはいききむねとして、うちにはちひをたしなみ、まとしきものにはなさけをかけ給ひければ、たみもゆたかに、くにもをさまり、一もんはんしやうはならふ人なかりけり。

かくて、ひめきみ、なにとなく、「いま一たび、ちゝにたいめん申さはや」と、あけくれなけ給ふ。あるとき、さいしやうとの、きたのかたにむかいて、おほせありけるは、「いかなる人にてましますそ。御なりの候へ。さのみ心ふかくをはしまし候」とおほせければ、「ありのまゝにかたらはや」と思へとも、「まことならぬをやの御なをたてたるにやあらん」とおほしめし、たゞ大かたにの給ひて、すきし給ふ。

さるほとに、わかきみをまふけ給ふ。又うちつゝき、ひめきみ、いてき給ふ。かくて、とりくゝにうつくしくわたらせ給へは、これにつけても、ちゝにみせまいせたくをほしめしける。さるほとに、はゝうへの御ほたいを、ねんころにとふらい給ひける。きやうをよみ、ねんふつ、ねんころに申、せきやうをひき、よろつさまく御とふらい給ふ。

さて、まゝはゝこせんは、心けんとして、けんなるまゝに、よの中もまとしくて、めしつかわれし物ともゝ、こなたかなたへにけさりて、あさ夕のせいろも、たへくゝになりける。御ふたりのあいたも、われくゝにて、ひとりもちたるひめきみも、とふ人もなし。

あるとき、ちゝこせんのゆめに、をくれしきたの御かた、みへ給ふやう、「はせのくわんおん参り給へは、うつくしき御すかたにて、しつほうのれんけのはなをつゝみ給ふ。」「いかにや、めつらしき、いつくにいらせ給ふぞ」とい給へは、「はちかつきのひめきみ、めてたきくわほうさかへ、あとのきやうよみ、ねんふつねんころなるゆへによつて、とそんでんの花のうてなむまれ候。くるしみもなく、御身にはうらみこそ候

へ。われらも、はかなくなりて、みなせこにて候に、なさけをこそかけすとも、なと、ひめきみをおい出し□、かやうのうらみ事にて。」「さて、ひめきみは、いつくに候やらんとおもふところに、御せんのれひのたかこゑに、めかさめぬる事のうたてさよ」との給へは、「ゆめはひとりなわとて、よくみるはあしきなり。きたのかたは、ちこくにをちて、くるしみのかなしきに、さやうにみへ給ふ。はちかつきは、はせのへつたうかしもへにくしてありつるか、むまれつきの心うせすして、へつたうの物をぬすみ、はてには、人のなかことをゆいあけ暮し、ぬすみして、かたちは、いよくもゆうせんのやうになりて、ひきつゝねられ、ありきつるか、たしかに、こちきにわたされて、しもへになるときゝしなり。」「ありくゝとくちひるをかい、ねふりくゝの給へは、ちゝ御せんは、なかゝ物ものたまわす。」「きたのかた、こをもたすして、あなかに、はせのくわんおんをしんし給ひしか、いかなることによ、みたまこ一人まうけ給ひて、たぐいなくもてなし給ひしに、をとなしくならせたまわは、にうこきさきにもそなわるとも、くるしからしと見へしに、はゝむなしくなりてのち、ふしきにかたはつきたるか、おやならぬなかとて、いろくゝゆいなしで、なにとなしつる事やらん、人のやうにもあらはこそ、人のめにもかからめ、あつくのくににかたゝすみて、人のこゝろをかぬらん、つくくゝおもへは、われながら、うらめしかりけるこゝろかな。としのほとをかそふれば、はやはたちにもなりぬへし。はゝはかりおやにて、ちゝはをやにてなきやらん、まゝはゝにをいいたされてふひんのものや、こいしや」と、いまさらなけかせ給へは、

きたのかたは、「をやこして、いかさま、とのは物のけにつき給ふか。きのふけふのことならず、はや、七八ねんのことなるを、いまめかはしくいゝいてさせ給へ」とて、そはなるつへをとりなをし、とのをちやうとそうちにける。

とのは、もとよりあきはてゝ、もちあつかひたるきたのかた、なこりはつゆもをしからず。まこしきすまいなりければ、ころにのこることもなし。よきつゐてとおもひきり、しのたのもり、くつのはの、ふたゝひあとへかへらすと、はせをさしてそいそきける。

「ひめは、くわんおんの給りたるこにあれば、かわらぬすかたを、いま一とみせ給へ。それかなわぬ物ならば、いのちをめて、らしいやうにて、ひとつはちすのゑんとなし給へ」と、かんだんをくたき申されけるところに、さいしやうとのは、みかとより、やまと、やましろ、いかのくに、三かこくをたまわりて、「やまとのほうらくのために」とて、みたい、きんたちはゝうへ、との、あに御たち、ちやうけの人々かすしらす、さゝめきわたりて、はせへそまいらせ給ひける。

いたはしや、ひめきみのゝうへこそんは、かの御たうにそをはしますか、「せはきそや、そなたへいてよ、しゆきやうしや」とて、ゑんをはをいたされて、みたうのうちへはいられず、ゑんのしたゑそ入ける。

きたの御かた、くわんおんの御まへにて、ねんしゆして、「ちゝのしゆみやうなからへて、たちまちあわせ給へ」とて、きねんし給ふ。ねんしゆもすてにすぎければ、くわいらうにいゝてゝ、せんをそひかせ給ひける。

参りけかうの人ゝは、とほしからぬ人なれとも、「かゝるくわほうのめてたき人なれば、あやか物そ」と、せんをとる。きんたち、をさなくましませは、おもしろくをほしめし、いたかれて御らんする。をのゝ、せんきやうとる物のなかに、としほと、五十あまりのものとみへ、をそこ、さもちんしやうやかにありしか、物の思ふけきにて、人めをしのひ、そてのうへをもひやるこそあはれなれ。

人々、これを御らんして、「こゝなるをそこ、あふてわかれのこひやらん、あわぬをもひのしのひねか、いかさま、物を思ふ人なり」とて、とふらふ物そをゝかりける。かのをそこ、わたすせんをはとらすして、きんたちを、めもあかすまほりをり、なくよりほかの事はなし。

人ゝ、あやししく思ひて、此よし、こそんへ申ける。こそん、きゝ給ひ、ちゝの事をは、ゆめにも思ひよりたまはず、「もしや、わかめのとのつまやらん」とをほしめし、「なにとてなく」とたつね、「きんたち、みまいらせ、なみたをなかつらん」といひければ、「すいさんの物そ」と、うちさいなみ給ひなは、「ひめかつへと思ふへし」と、ありのまゝにそ申ける。「一人のこをもたすして、はゝもろともに、このてらへ参り、ひめを一人もち、ほとなく、はゝにはをくれしを、ふひんとおもひ、あかし暮し申せしに、一もんの人ゝ、《を》とこのひとりすむ事かなふまし」と申て、あらぬつまをかかねてを、きゝをやならぬなかのかなしきは、いろゝゝにくみ申せしを、おとこのこゝろのはかなさは、たうさのをとしとこゝろへて、まゝはゝの申ことく、いたしめ候しか、あしにまかせて、ゆきかたしらすな

りにけり。あまりのふひんさに、此くわんおんに参りつゝ、あ
わせたまへと、きせい申せししやに、をそれ入たる事なれ
と、このきんたちにわかれしひめ、さなから、にさせ給ふほと
に、ふかくのなみたのなかるゝ」と、なく／＼かたり給へは、
ひめきみ、きこしめし、「そのをとこ、みすちかくめせ」とそ
めされける。

みすのうちより御らんして、やせをとろへて、御としもより、
やつれはてさせ給へとも、をやこのなかのあはれきは、「ちゝ
御せん□われこそ、いにしゑのはちかつきに候」とて、人め
もはちかゑりみず、みすのうちより、よろこひいて、そのとき、
ちゝこそん、「ゆめかうつゝか、ゆめならば、さめてののちは
いかゝせん。かほとにひゝしくわたらせ給ひて候か、何をたつ
ね給ひぬ□あふてのいまのうれしさ、いとゝなみたそひまもな
し」。ひめきみ、「いかばかりたつねいたしまいらせたく候ひつ
れとも、御とかもなき物ゆへ、御ふしんをかふふり、をいゑた
されまいらせ候か、御はつかしさに、御こいしく候へとも、まゝ
はゝこそんもをそろしや、おもひはゝかり、とし月をすこし、
ところにくくりあふ事こそ

(以下欠)

(いしかわ とおる)